



劇団「あゆみ阿南」

昨年11月の橘公民館での公演を皮切りに、加茂谷、富岡、那賀川の4地区で人権劇「かあさんの歌」が上演された。認知症になった祖母を巡る家族の葛藤と絆を描いた物語。根底には、高齢者特有の人権問題がある。認知症を学び、地域で支え合うことの大切さを訴えた。

演じたのは劇団「あゆみ阿南」の皆さん。劇団員は学校長、公民館長、地域役員など20〜70代の男女17人。人権劇に活発な小中学生に感化された山本 健さん(橘町)や渡辺純子さん(見能林町)が参画を募り発足させた。平成20年に初舞台を踏んで以来、今回で4作目となる。脚本・演出は渡辺さんが手がけ、小道具作り、舞台設営等の支援者もスタッフに加わり活動している。舞台を自らの人権学習の場と位置づけ、互いの人権意識を高め合いながら、それぞれの役者が持ち味を生かして演じきる。「練習は赤点でも、本番が満点だったらええんよ」と気負いは感じられないが、仲間とともに成長してきた舞台にかける思いは熱い。



公演直前には日を詰めて練習する。本番では笑いも誘いながら認知症の見守り方を演技で伝え、来場者から「身近な問題であり、正しい理解と支え合うことの大切さを学んだ」と評価を受けた。代表の渡辺さんは「客席の反応が次への原動力になります。人権を心の土台におき、夢と希望を育めるまちづくりの一助になれば。歩幅は小さくても、一歩ずつ歩んでいきたい」と目を輝かせている。

公演最終日のカーテンコールでは、200人を超える観衆に拍手で迎えられ、達成感に満ちた笑顔の花が咲いた。認知症の妻と岸壁で肩を並べ、「ふるさと」を口ずさみながら遠い記憶を手繰り寄せるシーンは涙を誘った。日本の心の歌として長く歌い継がれてきた「ふるさと」は、発表から100年を迎えた。この歌が、私たちの心に安らぎや明日への希望を与えてくれたように、世代を超えて親しまれる舞台であってほしいと願う。